



松原市商店街等 活性化プラン 概要版

松原市
平成31年3月





モノを売るだけでなく、

地域を支えるコミュニティの場として期待される商店街

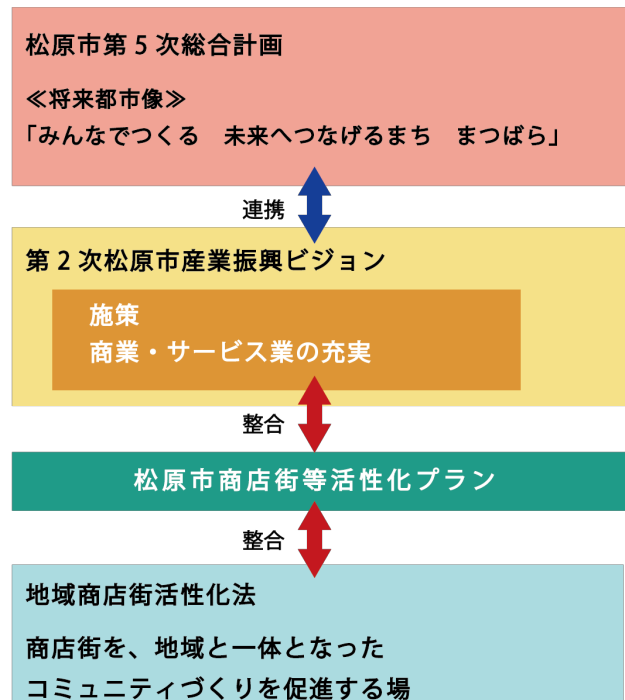
全国的に、少子高齢化や人口減少社会の到来、若年層を中心とした市外への人口流出、大型ショッピング店の市内進出など、様々な変化は急速に進んでおり、松原市も例外ではありません。こういった課題に、行政、市民、民間企業がそれぞれ連携を図りながら対応することが求められます。当然、松原市内の商店街にも社会的課題による影響が出ており、顧客・事業者の高齢化、後継問題、空き店舗の問題など様々な問題を抱えています。

このような現状を背景に、平成21年に施行された地域商店街活性化法では、商店街を「地域コミュニティの担い手」として活動する地域住民を支援する場として位置付け、商店街と地域が一体となってコミュニティを形成することで、商店街の活性化を促しています。つまり、商店街はモノを売るだけでなく、地域の生活を支えるコミュニティの場としても期待されています。

松原市商店街等活性化プランの位置付け

松原市商店街等活性化プランでは、様々な社会的課題に対して、商店街として求められている役割・あるべき姿や方向性を、松原市の現状及び将来に適応した形で示すことを目指したものです。

第2次松原市産業振興ビジョンでは、商業に関する政策として、「商業・サービス業の充実」を掲げています。この施策の考え方との整合性を図りながら、商店街の活性化のためのプランを策定します。



2

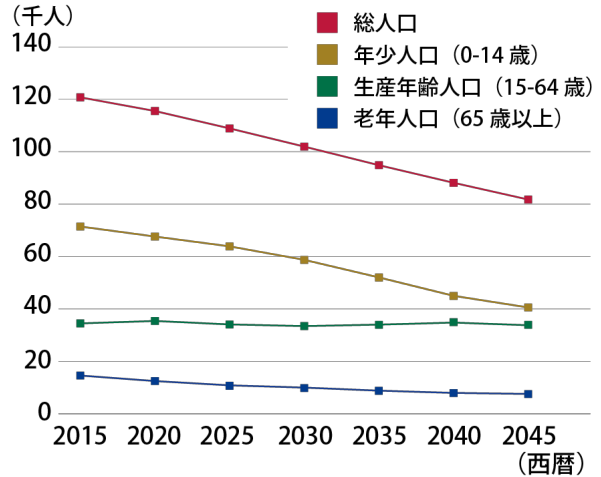
松原市の現状等



将来の年齢別人口

松原市では現在、40代から70代に人口が集中しています。将来的には少子高齢化が進むと推測されます。よって、あまり行動範囲が広くないと考えられる高齢者が増え、より市の暮らしにおける移動などの利便性・コミュニティなどの快適性が求められると考えられます。

総人口・年齢3区分別人口の推移



参考文献: 国立社会保障・人口問題研究所
男女・年齢(5歳)階級別データ 平成30年度

合計特殊出生率の推移

合計特殊出生率は1.3程度で、人口を維持できる水準値2.07(全国値)には及ばず、人口は今後も減り続けると予測されます。様々な要因が複合的に合わさった結果の現象であると考えられますが、子供を産みたい、育てたいと思えるハード面、ソフト面の両面の改善が求められます。

合計特殊出生率

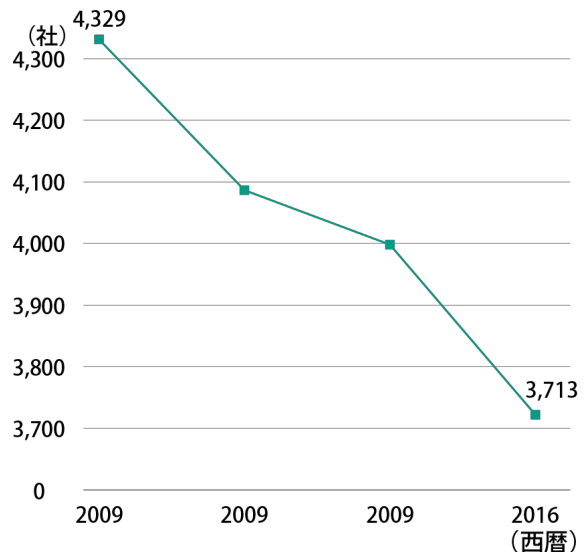
期間	松原市	大阪府全域
1983-1987	1.69	1.65
1988-1992	1.46	1.44
1993-1997	1.38	1.35
1998-2002	1.34	1.30
2003-2007	1.23	1.25
2008-2012	1.31	1.32

参考文献: e-Stat「人口動向統計特殊報告」

市内企業数の推移

2009年には4,329社あった企業数が、2016年には3,713社まで減少しています。このことから、松原市内の雇用者数も大きく減少していることが予測され、若者の流出につながっているとも予測されます。

松原市における企業数



参考文献: 総務省「経済センサス基礎調査」



松原市の商店街を取り巻く現況の把握をするため、商店街の利用者アンケート調査、商店街の事業者ヒアリング調査を行いました。それぞれの調査から、以下のような商店街の課題が見えてきました。

商店街を中心とした コミュニティの形成

利用者と店主の高齢化により、若年層と商店街のコミュニティが弱い商店街が多く存在しています。商店街を中心とした多世代のコミュニティの形成を促すことが今後の商店街に求められます。

店同士が連携した サービス・商品の 専門性の向上

1つの店舗だけでサービスを完結させるのではなく、他の同じ業種や似た業種の店舗と連携を図りながら、サービスの質を高めていくことが今後求められます。

滞在時間を長くする サービスの捻出

店主とのコミュニティの形成や、あるニーズを持つ市民が集まり商品やサービスを学ぶ機会を持つなど、「買う」という行為だけではないサービスを企画する必要があります。

高齢者・子育てを サポートできる サービスの捻出

高齢者が他の世代にスキルや知識を伝える場を企画したり、子供を持つ母親のコミュニティ形成のための場を企画するなど、の課題を抱える市民を対象にした、商店街サービスの捻出が今後必要になるでしょう。

地域の生活に密着した サービスの提案

利用者とのコミュニケーションの中で、利用者の生活を把握し、また、地域の祭りなどのイベントでも利用できる商品やサービスの提案をすることが、大型店舗との差別化につながると考えられます。

地域の機関や 地域住民と連携した サービスの開発

学校や地域住民のイベントとのタイアップ・交流は、色々な世代の方と関わりを持つことが期待でき、色々な世代のニーズに対応するきっかけになると考えられます。

商店街の活性化に向けた 多世代との対話の場を 創り出すまちづくり

活性化は商店街だけでなく、市民も一緒になって考える必要があります。ソフト面では市民と対話する場をコーディネートできる人材の育成、ハード面では多世代が賑わい、対話できる道路整備、空き店舗の活用・整理が求められます。



商店街は市民の生活に密着した大切な場所です。松原市商店街等活性化プランを市民の参画と協働によって策定するために、市民参画型のワークショップ「未来の商店街をつくるワークショップ」を開催しました。ワークショップを通じて参加市民同士で取りまとめた、商店街で取り組みたい事業のコンセプトは以下の4つです。



情報共有の場としての商店街

商店街にどのようなお店・サービス・仕事があるのか、どのような過ごし方が商店街ではできるのかを、みんなで共有できる場づくり・仕組みづくりです。情報を発信するだけでなく、その情報をみんなで楽しむことができる商店街を目指します。



家族・子育てサポートの場としての商店街

母子・父子家庭、核家族など、様々な形の家族があり、親も子も様々な環境下で頑張って成長しようとしています。そんな家族や子供が孤立しないよう、店で扱う商品や店の人のコミュニティでサポートできる商店街を目指します。



健康サポートの場としての商店街

まちの人が健康に過ごすことは、まちの基本的な目標です。体にいい食のあり方、運動の仕方など知識を市民と共有し、健康な状態で楽しく過ごせるよう、健康をサポートできる場としての商店街を目指します。



観光の場としての商店街

有名な建物や景勝地をめぐるというのではなく、観光地での過ごし方に工夫が求められる時代となりました。観光地としての商店街、周囲の観光資源と観光客をつなぐ役割としての商店街など、観光の場としての商店街を目指します。



商店街における取り組みのコンセプトをもとに、ワークショップ内にて、具体的な取り組み例が発案されました。それぞれのコンセプトに対応した取り組み例は以下の通りです。

情報共有の場としての 商店街

情報を発信することは、情報を商店街の利用者に一方的に投げかけているにとどまっていた、事業者と利用者が商店街の情報を共有できていないかもしれません。共有のためには、利用者に足を運んでもらう仕組みづくりが求められます。



取り組み例1 みんなで作ろう松原マップ

商店街を普段利用しない人に商店街に来てもらい、マップ、冊子などを作成して情報発信するプロジェクトです。参加者はカメラのスキルや情報発信のスキルが学べ、商店街を知るきっかけにすることができます。

参加ポイント制にして、ポイントが貯まると松原の特産物をプレゼントするような仕組みを導入したり、子供向けにするなど継続して商店街に来てもらえるようなマップ、冊子づくりを目指します。



取り組み例2 商店街店主マップ

近隣大学や高校等とタイアップし、学生や地域の人と一緒に、商店街を舞台に店主インタビューを実施し、内容をまとめて冊子として発行するプロジェクト。制作された、店主を紹介する冊子は、地域のイベント等で配布し、お店の内容だけでなく、店主とコミュニケーションをとることができる冊子を作成します。



取り組み例3 まつばら商店街探検隊

① 商店街ウォーキングツアーの実施

「食」を介して、商店街の店主、学生同士がコミュニケーションをとるプログラムです。学生が商店街にリピートして来てもらうきっかけにします。

② ウォーキング企画の考案に係るファシリテーション講座

①を具体的に企画して、企画のスキルアップを狙う、企画講座を実施します。また、ディスカッションを円滑に進めるスキルを学ぶファシリテーション研修を実施します。



取り組み例4 出張商店街 in 阪南大学

高校や大学等の学校に商店街のお店が商店街を飛び出し、お店を開くプロジェクトです。日替わり、週替わり、月替わりなど、運用方法は要検討ですが、市民の生活を支えることができる商店街は、学生の生活も同様に支えることができることでしょうか。一方で、学生は商店街に対し、商品や店に対する意見を言うことができたり、商店街とのコミュニティをつくるきっかけを持つことができます。

家族・子育てサポート の場としての商店街

住民が互いに育て合う生涯教育の機会、子どもや子育てを行う家族をサポートする行政と住民の活動、子どもからお年寄りまでの自己実現の場の創出が求められます。



取り組み例1 学びのだんらん

夕食（ケータリング）とミニWSで構成されたイベントです。様々な切り口で学びを提供することで、松原市内の「働くママ」の居場所を商店街に作っていき、商店街に足を運びきっかけを作ります。運用例は以下の通りです。

- ・毎月1回の実施
- ・18時開場、18時30分夕食スタート、19時30分ミニWSスタート
- ・参加費は大人1,000円、子供500円（1名につき）
- ・対象は3歳から小学校低学年まで



取り組み例2 みんなのカフェテリア

「食を介したコミュニティづくり」「集まった人みんなで困りごとを考えるコミュニティづくり」を展開します。現在松原市で展開されているこども食堂を通し、こども食堂で受け入れている以外の人たちへの変則的なメニューとして別コンテンツを実施（松原市在住の外国籍の方の国の食文化の共有）します。

こども食堂を拡張させながら受け入れの間口を広げ、課題に応じた専門的な協力者のネットワークを作り、これまで解決できなかった課題や問題に対し、あらゆる角度から、コミュニティ内で共有・連携することで、地域社会がとりくめる体制づくりを目指します。

健康サポートの 場としての商店街

個人の健康をサポートするのみならず、もともと商店街が担っていた地域のコミュニティの場を活用し、健康を介したコミュニティサービスが求められると考えられます。



取り組み例 まつばら食の学校

月に1回「まつばら食の学校」を商店街内に開講するプロジェクトです。商店街で売買されている食材をテーマに、健康になる食の楽しみ方を学ぶことができる学校です。テーマは毎回1つの食材（旬の野菜もしくは魚）とし、食材の生産者、売っている商店街の八百屋さんやお魚屋さん、調理する地域の方をゲストに迎え、①採るひと②売る人③食べる人の3部構成で授業を展開します。

商店街を学び場とすることによる価値向上、商店街と学生と地域の方の関係づくりに寄与するプロジェクトです。

観光の場としての 商店街

物見遊山的な観光だけでなく、目的地までの体験としての観光の視点も必要になります。観光客が商店街を活用する仕組みを考えることが今後求められてくるでしょう。



取り組み例 レンタサイクル

松原市内には、歴史的資産が点在していますが、周遊できる交通手段がありません。また、電車のないエリアで生活されている方々は移動の交通手段があまりありません。移動の手段が乏しいことは、観光客、市民の方々それぞれに影響を出しています。

商店街の事業者と協力を得て、レンタサイクル事業を展開してもらおうプロジェクトです。空き店舗の活用も考えられます。商店街でレンタサイクル事業を展開することで、商店街に利用者が足を運びきっかけづくりを目指します。